

(様式第 1 3 号)

学 位 論 文 要 旨

氏名: 平山 耕三

題 目: 貿易自由化に対応した黒毛和種肥育経営に関する研究
(Study of Japanese Black Cattle Fattening Management correspond to Trade Liberalization)

要 旨

本研究では、WTO 体制下における貿易自由化に、どのように黒毛和種肥育経営が対応すれば良いのかを明らかにすることを目的とした。この目的のために、直面する TPP をとり上げて、消費者と肥育農家に調査を行って、数量的な分析を行った。

第 1 章では、先行調査と先行研究例に基づいて、農産物輸入自由化の経過、TPP 交渉への参加までの経過、TPP 加入後の影響について述べ、貿易自由化のトレンドは止めることはできないことを指摘した。また、黒毛和種は高級牛肉として輸入牛肉と差別化されており、貿易が自由化されても生き残っていける品目であることが明らかとした。しかし、黒毛和種肥育経営農家が、高級牛肉生産をするための技術対応については研究がなされていない。そこで、貿易自由化後の黒毛和種肥育経営の展開方向の解明を本研究の目的とし、第 2 章以降において貿易自由化の対策について研究を展開した。

第 2 章では、「消費者は TPP 加入に積極的ではないが、年齢層によっては安価な牛肉を望む層がいる。しかし、大多数は安全・安心な国産牛肉を支持している」という仮説を立てた。分析方法として、数量化理論により分析した。その結果、第 1 に、消費者は国産志向の傾向が強く、TPP 加入にも否定的な面が強いが、食べ盛りの子供を抱えている「中年層」は、比較的安価な輸入牛肉を指向する傾向にあることを明らかにした。第 2 に、「若年層」は、TPP についての知識が少なく、TPP 加入、安価な輸入牛肉を購入するかどうかはわからないという意見が多かったが、感心が低いことを明らかにした。第 3 に、「壮年層」は、TPP 加入には否定的で、TPP 加入後も安価な輸入牛肉を購入しないことを明らかにした。すなわち、「中年層」は安価な牛肉を望むが、大多数の消費者は安全・安心な国産牛肉を支持していることから、仮説は立証された。

第 3 章では、「黒毛和種肥育経営は、高級牛肉を低コストで生産できれば、存続できる。そのためには、適切な飼養管理により若令子牛の肥育と早期出荷が必要である」との仮説を立てた。分析方法として、労働時間の調査と観察調査を行い、重回帰分析法により分析した。その結果、第 1 に、高級牛肉生産は、高齢農家もつ高度な飼養管理技術によって継続されることが明らかになった。第 2 に、低コスト生産として、「200 日 200kg での導入」と「24 カ月肥育の可能性」への取り組みが必要である。ということが明らかになった。ただし、肥育期間を短縮させるためには高い生産技術が必要であり、高齢農家から青壮年農家へ技術の伝承を図る必要があることを指摘した。以上のことから、仮説は立証された。

第 4 章では、2 つの仮説を立てた。すなわち、第 1 に、「高品質を支える様々な作業は、飼槽の清掃、飼料給与、観察、温度把握、換気などの環境調整、牛舎内外の清掃、牛体手入れ、飼料調整、子牛導入、出荷、敷き料交換などである。これらの作業の中で、特に品質の向上に影響を与える作業がある」という仮説を立てた。分析方法として、労働時間の調査と

観察調査を行って、そのデータにより重回帰分析を行った。その結果、上物率に影響を与える要因としては、日常管理作業として「清掃時間割合」、「飼槽清掃時間割合」、「観察時間割合」と、不定期管理作業として「敷き料交換頻度」が重要な作業であることを明らかにした。このことによって仮説を立証した。第2に、「肥育農家が主体性をもって技術の実行や、習得に積極的に取り組むことが、品質向上につながる」という仮説を立てた。分析方法として、主体的要因についてアンケート調査を実施して、そのデータにより重回帰分析を行った。その結果、上物率の向上と「主体的要因」の間に強い関連が認められた。すなわち、「専門誌購読」、「研修会参加」、「農業新聞購読」、「部会出席」、「敷き料交換頻度」、「牛の手入れ頻度」、「枝肉出荷立会い」、「清掃頻度」、「営農意欲」、「投薬」、「飼料調整頻度」が重要な主体的行動であることを明らかにした。このことによって仮説を立証した。

第5章では、「肥育農家の経営者能力格差は、飼養環境の管理要因と農家の主体的要因の格差に帰結している」という仮説を立てた。分析方法として、アンケート調査結果に基づく数量化理論などにより分析した。その結果、優良肥育農家、普通肥育農家、不振肥育農家の3つに類型区分すると、管理要因（「牛体管理」、「環境管理」、「ストレス管理」）と主体的要因（「主体的行動」、「営農意欲」、「知識欲」）について明瞭な格差が認められた。このことによって仮説を立証した。

第5章の補章では、肥育農家について飼養環境を測定し、その牛舎環境の内外格差を分析した。その結果、第1に、「牛舎内部気温」に影響を与える要因は、「牛舎外部気温」、「牛舎外部湿度」、「牛舎内部風速」、「牛舎内部湿度」であり、外部の風や、湿気、気温が牛舎内環境に大きく影響しており、外部の環境制御が牛舎内部の環境の良否を左右していることを明らかにした。第2に、上物率が高い優良肥育農家は、外気温と比較して牛舎内部の気温を下温し、調節していることを明らかにした。すなわち、優良肥育農家は、牛にとって快適な環境を整備することにより、品質が高い牛肉を生産している。このことによって、第5章の仮説を具体的に立証した。終章では、本研究の総括を行った。